

問 1①最花式土器

青森県むつ市にある最花貝塚から出土した土器を標式とする縄文時代中期末葉の土器型式で、東北北部に分布する。最花式土器は、青森県外ヶ浜町三厩の中の平遺跡を標式とする中の平Ⅱ式に後続する大木系土器群で、大木 10 式に併行する。器形は、深鉢・鉢形や広口壺形を主体とし、他に台付鉢形がある。文様構成は、1 段・2 段・無段がある。1 段のものには直線ないし上端を閉じる長楕円形文や蕨手文が施される。2 段のものは、上段に区画文や連続文、下段に懸垂文を組み合わせる。無段のものは、縄文のみのものが多いが、口頸部のくびれ部に連続刺突や撚糸圧痕を施文するものもある。

問 1②会津大塚山古墳

福島県会津若松市にある国史跡に指定されている古墳時代前期の前方後円墳。会津盆地東部にある一箕古墳群を代表する古墳で、大塚山の山頂に位置する。前方部二段・後円部三段築成の前方後円墳で、東北地方では 4 番目に大きい。主体部は後円部の中心から検出された 2 基の割竹形木棺である。南棺には日本製の三角縁神獣鏡をはじめ三葉環頭大刀や鉄剣などの刀剣類、靱、鉄製農耕具、勾玉・管玉などの玉類、北棺にも紡錘車や管玉、刀子などが副葬されていた。会津地方が 4 世紀末にはヤマト政権の支配下に組み込まれたことを実証した貴重な遺跡である。

問 1③薬師前遺跡

青森県五戸町（旧倉石村）にある縄文時代後期前葉の遺跡で、十腰内文化を特徴づける再葬用土器棺墓が検出されたことで知られる。墓坑の上部には配石を伴い、墓坑内からは土器棺に使われた深鉢形土器、壺形土器各 3 点が出土し、内 1 点の土器棺では尺骨に装着された状態の貝輪と猪牙製垂飾が発見された。墓坑から出土したこれらの遺物は重要文化財に指定されている。薬師前遺跡の再葬墓は、縄文時代後期十腰内文化圏での集団墓の実態と葬送儀礼の一端をよく示す資料として重要である。

問 1④複式炉

土器埋設炉や石組炉と掘り込み部（前庭部）から構成される大型の屋内炉で、縄文時代中期後葉から末葉に東北地方南半部を中心に広く分布する。掘り込み部（前庭部）は住居の中心より壁際に近く、火を受けていないことから、炉に薪を入れる作業をする場所とする説、竪穴住居の出入口とする説、炉にまつわる祭祀を行った場所とする説などがある。複式炉は複数の炉を持つ場合が多く、この時期に炉の機能に何らかの変化があった可能性が高い。寒冷化に伴い主要な堅果植物がアク抜きを必要としないクルミからアク抜きを要するドングリやトチに変化したことに伴い、炉の構造が複雑化した可能性が指摘されている。

問 1⑤有孔鏢付土器

口縁部と鏢状の隆帯の間に直径 5mm 前後の貫通孔が列状にならぶ樽形や壺形の土器で、武藤雄六によって命名された。有孔鏢付土器の祖形は、縄文時代前期末期の諸磯式の口縁部に小孔の空いた浅い釜型の有孔土器に求められる。中期初頭には橋状把手が現れ、樽型や壺型など器種が多様化するとともに大型化する。中期中葉には小孔や鏢状隆帯が形骸化しはじめ、分布域は中央高地から北陸・関東など東日本各地に拡散する。中期後葉には小孔が鏢部へ設けられるようになる。中央高地では小孔や鏢状隆帯が消失し、両肩に把手の付けられた広口壺形の両耳壺に変わるが、関東地方では形骸化した小孔が保持されている。中期末には注口部のあるものが現れる。有孔鏢付土器の用途に関しては、縄文農耕論の立場から藤森栄一や武藤雄六が唱えた植物種子の貯蔵容器説、同じく武藤が唱えた酒造具説、山内清男や小林達雄が提唱した土製太鼓説などがある。有孔鏢付土器は小型のものから大型のものまで容量に多様性があることから一つの用途に限定することは難しい。有孔鏢付土器は他の同時期の土器に比べ精巧に作られたものが多いことから、再葬用蔵骨器の可能性も含めて考える必要がある。

問 1⑥中谷治宇二郎

石川県出身の戦前の縄文研究者で、「注口土器」の命名者。東京帝国大学理学部人類学科選科に提出した卒業論文『注口土器ノ分類ト其ノ地理的分布』は『東京帝国大学理学部人類学教室研究報告』として刊行された。同時代の縄文研究者である山内清男・八幡一郎が貝塚の層位学的調査による縄文土器の型式設定と編年研究を目ざしたのに対して、中谷は縄文土器の形態や文様の「群」（様式）による規則的な変化の方向性を導きだし、複雑な文様が次第に単純化すると考えた。兄で物理学者の中谷宇吉郎を頼ってフランスの民族考古学を学びに私費留学したが、夭折した。

問 1⑦両墓制

両墓制は、遺体を埋葬する墓地（埋め墓）とは別に、石塔（墓石）を建てる墓地（詣り墓）を設ける墓制を指す民俗学によって提唱された用語である。民俗学では両墓制に関する関心は高く、その起源について、古くは祖霊信仰に基づく日本固有の古い習俗であり、古代の改葬・風葬習慣から両墓制が発生したとする柳田國男の見方もあったが、今日では日本の土葬墓制史のなかに石塔という新たな要素が導入された際に派生したとする説が有力である。両墓制は、近畿地方を中心に、中国・四国、中部・関東地方の一部に見られるが、東北や九州では稀である。火葬率が 99.9%を超えた現在、土葬を前提とする両墓制は過去の葬墓制となった。

問 1⑧狩猟文土器

縄文時代中期末から後期前葉に、青森県を中心に東北地方で見られるクマなどの四足動

物の狩猟場面を描いた土器。四足動物のほかに弓矢やワナ、樹木などが隆線により表現されている。青森県内では青森市山野峠遺跡をはじめ再葬用土器棺に狩猟文を伴う事例が知られる。同時期の類似資料に、土器の内定面に四足の動物を貼り付けた「動物形内蔵土器」がある。具象的文様に乏しい縄文土器のなかでは珍しく具体的かつ物語的な文様をもつ土器で、特別な用途に使われたと考えられる。

問 1⑨菅江真澄

三河国出身の江戸時代後期の紀行家・本草学者。出羽・陸奥・蝦夷地など日本の北辺を旅し、多数の紀行文を遺したことで知られる。真澄の紀行文からは、東北北部の民衆や北海道アイヌの生活や習俗、天明の飢饉の最中の悲惨な様子がうかがえる。真澄は縄文土器や土偶など考古遺物にも関心を寄せ、青森市三内丸山遺跡やつがる市亀ヶ岡遺跡をはじめ、青森県や秋田県内の遺跡から出土した遺物のスケッチなどを遺している。真澄は亀ヶ岡遺跡の土器が北海道の根室から発見された土器と似ていることから、「いにしえ蝦夷」が製作したと考えた。

問 1⑩方形周溝墓

弥生時代前期中頃から古墳時代前期にかけて造られた墓で、低い方形の塚の周囲に溝を巡らせ、塚の中央に埋葬用の土坑をもつ。朝鮮半島に起源を持つ方形周溝墓は、弥生前期中頃に西日本で出現し、中期中頃に南関東、後期には北関東・東北南部へと広がった。一般に壺・高坏をはじめ、器台・甕・鉢などの供献の土器類を伴う。方形周溝墓は複数の埋葬施設が見られることから、家族の墓だったと考えられる。また、複数の方形周溝墓が密接して営まれることが多い。副葬品や赤色顔料の使用の有無などに階層性が伺える。

問 2 埋設土器を調査・報告する際に、どのような点に留意すべきか、自らの考えを述べよ。

これまでの発掘調査経験を踏まえ、遺構の調査方法と調査報告書への事実記載ならびに考察のあり方を問う。埋設土器の機能・用途を現場でいかに認識し、それを調査報告書にどのように表現するか、ある程度具体的な記述がなされていること。

出題意図

問 1 は考古学の基本的な方法論や専門用語に関する知識を問う。

問 2 は発掘調査現場での実地経験を踏まえ、遺構の調査方法や出土遺物の整理・観察の能力を問う。